山口大学教育学部研究論叢　第70巻　273頁～282頁　2021年1月

西日本方言話者の用いる「クナイ」について

黒崎貴史*・有元光彦**

On the "kunai" Used by Speakers of Western Japanese Dialect

KUROSAKI Takashi*, ARIMOTO Mitsuhiko**

(Received September 25, 2020)

1．はじめに[1]

10年ほど前から，若年層の間で下記のような「～クナイ」という形式が使用されている。

（1）カラオケくらい普通に行くクナイ？

(2019/05/11　大学生女子→大学生女子)

（2）1A：明日学校よね？

2B：え、違うクナイ？

(2020/07/03　高校生女子→高校生女子)

（1）には，大学生であれば誰でもカラオケに遊びに行くだろうという話し手の見込みが表れている。（2）は，翌日に学校で授業があると思っている1Aに対して，休みだろうという2Bの意見が表れている。このように，「クナイ」を文末に用いることで問いかけの形式を取りながら，話し手自身の意見を聞き手に表明している。

黒﨑（2019）においては，山口県若年層を対象に「クナイ」の使用実態について調査を行った。その結果，上記のような「クナイ」という文末形式は，形容詞の否定疑問形式から独立し，一つの文末形式として機能しているものと指摘した。同様の指摘は，高木（2009）や平塚（2009）においてもなされている。また，主観的で曖昧な情報であるにも関わらず聞き手との共有を求める文脈でも使用可能であることも指摘した。これは，若年層のコミュニケーションには，聞き手は自分と一致あるいは類似した認識を持っているだろうという話し手の意識が反映しているのではないかと考える。さらに，「クナイ」の共起関係について方言の影響があることを示唆した。しかし，方言間の差異については十分な考察が行えなかった。

本稿では，福岡・大阪・福井在住の西日本方言話者である若年層を対象に，文末形式「クナイ」の使用実態を調査し，方言間の異同について分析を行う。これにより，方言学の観点から「クナイ」の形成プロセスについての分析を試みる。また，「クナイ」の共起関係および用法，そして若年層のコミュニケーションスタイルについても考察を行う。

2．先行研究

先述したように，「クナイ」は話し手の意見を述べる否定疑問形式であると判断する。また，聞き手も自分の意見に同意してほしいと話し手が考えていると判断することもできる。本節では，否定疑問形式および，「クナイ」について言及した先行研究について触れる。

2．1．否定疑問文における傾き

安達（1999）は，否定疑問文において，命題の真偽を問うのではなく，話し手が命題について予測を立てたものを「傾き（bias）」という概念で捉えている。例えば（3）の場合，「お腹が空いている」という命題の真偽を問題にしているのではなく，聞き手は「お腹が空いているだろう」という話し手の予測が表れている。

（3）お腹が空いていませんか？

このように，否定疑問形式には，話し手の何らかの予測を伝えるという働きがある。

2．2．クナイについて

「クナイ」を扱った研究には，平塚（2009），高木（2009），黒﨑（2019）が挙げられる。それぞれの研究で指摘された点をまとめたものが【表1】になる。

* 山口大学大学院東アジア研究科コラボ研究特別推進体研究員
** 山口大学国際総合科学部
[1] 本研究の一部は，日本学術振興会・科研費・若手研究No. 20K13048によるものである。アンケート調査においては，九州大学の高山倫明先生、花園大学の橋本行洋先生、福井高等専門学校の門屋飛央先生の御協力を得た。記して感謝する。

【表１】「クナイ」の先行研究の対応表

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>山口・福岡・広島　黒崎(2019)</th><th>福岡　平塚(2009)</th><th>関西　高木(2009)</th></tr>
<tr><td rowspan="5">前接要素</td><td>動詞</td><td>状態性の有無は問わない</td><td colspan="2">状態性のあるものは可</td></tr>
<tr><td>名詞</td><td>部分的に可</td><td colspan="2" rowspan="2">不可</td></tr>
<tr><td>形容詞</td><td rowspan="2">容認されつつある</td></tr>
<tr><td>形容動詞語幹</td><td>「変(だ)」のみ可</td><td>不可</td></tr>
<tr><td>その他の品詞</td><td>名詞性のあるものは容認されやすい</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2" colspan="2">用法</td><td></td><td colspan="2">同意要求に特化</td></tr>
<tr><td>「違う」「変(だ)」は〈否定〉でも用いられる

〈話し手の見込み〉は，追認可能でなくても使用可能
客観性よりも主観性に重きを置く</td><td>「変(だ)」のみ〈否定〉で用いられやすい</td><td>〈否定〉〈話し手の感情〉は表せない
次の条件を満たせば，〈話し手の見込み〉を表す

①聞き手と話し手の立場が対等(だと話し手が考えている)
②判断の妥当性が追認可能な場面</td></tr>
<tr><td colspan="2">成立プロセス</td><td>二重否定ンクナイ
→動詞基本形に接続

形容詞と形容動詞との近接性が九州西部から広がった。</td><td>二重否定ンクナイ→動詞基本形に接続

形容詞カ語尾→変クナイ</td><td>二重否定ンクナイ・ヘンクナイの登場
→動詞基本形に接続

形容詞の否定コトナイ
→同意要求はクナイに移行</td></tr>
</table>

平塚（2009）と高木（2009）の共通点や相違点について述べる。両者の共通点として，形容詞の否定疑問形式から「クナイ」形に派生した〈同意要求〉に特化した文末形式であることや，「できる」や「違う」といった状態性のある動詞を前接要素として持ちやすいこと，名詞や形容詞とは共起しないことが挙げられる。

平塚（2009）は，福岡の若年層の用いる「クナイ」について，動詞以外の品詞では，形容動詞語幹「変（だ）」のみ共起できると述べている。これについて，九州方言のカ語尾の影響により形容詞と形容動詞の区別が曖昧になったためであると示唆している。

しかし，黒﨑（2019）では上記と異なる結果が得られた。まず，共起関係については状態動詞のみに関わらず，動作動詞においても高い親和性が見られた。また，「大きい」「悲しい」「静か（だ）」「元気（だ）」のような形容詞および形容動詞語幹との共起も見られた。さらに，教養度は低いものの，名詞との共起も確認できた。特に，「メンヘラ」[2]のような状態性を表す名詞との親和性は高くなると推測できる。

また，高木（2009）は下記のようなアスペクト形式を用いた文においてクナイは容認されないとした。

（４）ほんとは、ちょっと後悔しとる［してる］クナイ？

（５）［先生の部屋の前まで来てドアをノックしても返事がない場合］

A：先生，おらん［いない］なあ

B：でも電気ついとるから，学校には来とる［来てる］クナイ？

（４）は，本当に後悔しているかどうかは聞き手本人にしか分からず，「話し手より聞き手が情報量を多く有している」ため容認できないとした（cf. 高木　2009：９）。（５）は，先生が本当に学校に来ているかどうかをその発話場面では確認ができず，「話し手の判断の妥当性を追認できるものが発話場面に存在」しないため容認されないとした（cf. 高木　2009：９）。このように，話し手の判断の根拠が曖昧である場合は「クナイ」は用いられなかった。

また，話し手の判断に関して高木（2005）は，関西方言「コトナイ」について，「思う」を前接要素として持つ場合に以下のような使用制限があると述べた。

（６）＊梅の花っていい匂いがすると思うコトナイカ？

（補文中の内容「梅の花はいい匂いがする」の真偽を問う）

（７）前輪が両方パンクしてたら、さすがに様子がおかしいと思うコトナイカ？

（主節末までを含んだ命題内容「おかしいと思う」の真偽を問う）

（６）は，傍線部を「思わないか」に変えると使用可能であると述べた。これに関して，「思う」の否定疑問形式が，「話し手の認識の妥当性を聞き手に問う固定化された表現」（高木　2005：85）となっているため，「コトナイカ」とは交替できないとした。平塚（2009）も，同様の理由で「クナイ」も交代できないと示唆した。

しかし，黒﨑（2019）では，（４）～（７）の例文でも高い容認度が認められた。このことから，「クナイ」

[2]　元々はインターネットスラングであり，「精神的に問題を抱えている人」を指す。「メンタルヘルス（精神衛生）」に英語の接尾辞-erを接続させて生まれたものと考えられる。

は話し手の認識を聞き手に共有するための形式ではないかと考える。また，（4）や（5）のように話し手の判断の根拠が曖昧な文脈でも使用可能であり，若年層のコミュニケーションにおいては，客観的な確実性よりも「話し手にとって確実であるか」という主観的な根拠が重要視されるのではないかと考えられる。

また，形容動詞語幹は〈否定〉の用法でも用いられた。これについて，福岡・山口・広島の地域別に分析したところ，福岡方言話者が最も形容動詞語幹との共起に対する容認度が高かった。次いで山口方言話者が高く，広島方言話者は最も低かった。住田（1985）にあるように，九州方言には形容動詞がカ語尾化し形容詞との区別が曖昧になる。そのため福岡では容認度が高いのだろう。また，福岡以東にも容認が確認されることから，カ語尾の影響が福岡から少しずつ東日本側に広がりつつあるという結論に至った。

「クナイ」を扱った研究で最も新しいものは黒﨑（2019）であるが，山口県在住の若年層のみを対象にしたため，上記のような指摘が普遍的であるとは言い難い。そこで，複数地域の若年層を対象に調査を行い，「クナイ」の使用実態や用法についてより細かく見ていく。

3．調査方法

福岡方言話者（32名），大阪方言話者（67名），福井県嶺北方言話者（21名），福井県嶺南方言話者（114名）の18～21歳の若年層を対象にアンケート調査を行った。福井方言話者を嶺北と嶺南に分類した理由は，方言区画論では嶺南方言は近畿方言に分類されており方言の差異があることから，「クナイ」の形成プロセスを考察する上で重要であると判断したためである。

調査方法は．「クナイ」を用いた例文を見せ，どれだけ容認できるかを回答させた。回答項目は，「◎：使う」「○：使わないが聞いたことがある」「△：使ったことも聞いたこともないが違和感はない」「×：不自然」を用意した。今回は，男女差については考察しない。作例文は以下の通りである。

【表2】アンケートの作例文

(a)	寝る時、電気消すくない？	(z)	秋といえばスポーツくない？
(b)	カラオケくらい普通に行くくない？	(aa)	あの子、先生の子供くない？
(c)	こんな見た目だったら子供泣くくない？	(ab)	あいつの言動って子供くない？
(d)	この花って、いい匂いがすると思うくない？	(ac)	そのシャーペンって、俺／私のくない？
(e)	車の前輪が両方パンクしてたら、さすがに様子がおかしいと思うくない？	(ad)	それって、めちゃめちゃいいことくない？
(f)	この点差だったらもうあきらめるくない？	(ae)	それは言い過ぎくない？
(g)	マックのポテトってさ、なんかめちゃくちゃ美味しく感じるくない？	(af)	今から勉強しても焼け石に水くない？
(h)	あの本屋なら、文房具とかもあるくない？	(ag)	[聞き手に向かって]ほんとは、ちょっと後悔しとる[してる]くない？
(i)	こんな問題、小学生でもできるくない？	(ah)	[先生の部屋の前まで来てドアをノックしても返事がない場合] A：　先生，おらん［いない］なあ B：　でも電気ついとるから，学校には来とる[来てる]くない？
(j)	デザートって、食後に食べるくない？	(ai)	その考えは違うくない？
(k)	もうお腹いっぱいだから、俺／私の分も食べるくない？	(aj)	その考えは違うくね？
(l)	甘いものって、満腹でも食べれる［食べられる］くない？	(ak)	その考えは違うくないですか？
(m)	一人でいるの悲しいくない？	(al)	今、A高校の制服ってセーラーなん［なの］？昔は違ったくない？
(n)	この魚結構大きいくない？	(am)	今、A高校の制服ってセーラーなん［なの］？昔は違うくなかった？
(o)	この辺、めっちゃ静かくない？	(an)	昔は逆上がりなんか、簡単にできたくない？
(p)	風邪って言ってたわりには元気くない？	(ao)	昔は逆上がりなんか、簡単にできるくなかった？
(q)	[自分の服装がおかしくないか聞き手に確認したくて]この服装、変くない？	(ap)	この映画、こないだ一緒に見たくない？
(r)	[聞き手の服装がおかしいことを指摘するために]その服装、変くない？	(aq)	昨日ダンスの練習したくない？
(s)	元気にしてる？学校、大変くない？	(ar)	昔、お父さんとここに来たくない？
(t)	大体、年度はじめが一番大変くない？	(as)	子供って、キャラクターもの好きくない？
(u)	最近、土曜日っていつも雨くない？	(at)	子供って、ピーマン嫌いくない？
(v)	[曇り空を見ながら]なんか、今日雨くない？	(au)	すぐ怒鳴る人って嫌[イヤ]くない？
(w)	揺れた？地震くない？	(av)	魚はあんまり好きくない。
(x)	熱の出ないインフルエンザってもはや風邪くない？	(aw)	基本的にアイドルは興味ないけど、欅坂46は嫌いくない。
(y)	あいつ、結構メンヘラくない？	(ax)	夜中にLINE来たらムカつくけど、好きな人からなら嫌くない。

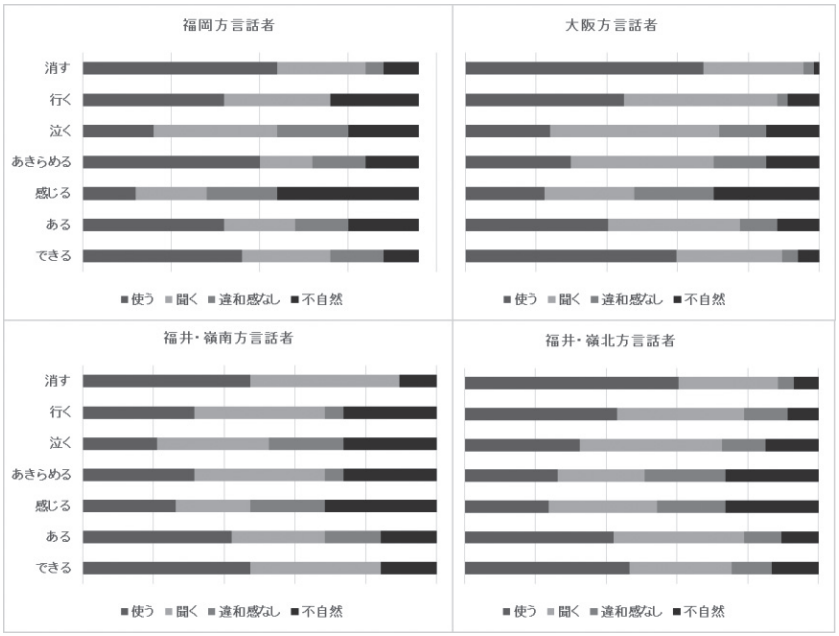
4．分析

本節では，文末形式「クナイ」の共起関係および用法・形態に着目し，それらの様相について考察を行う。

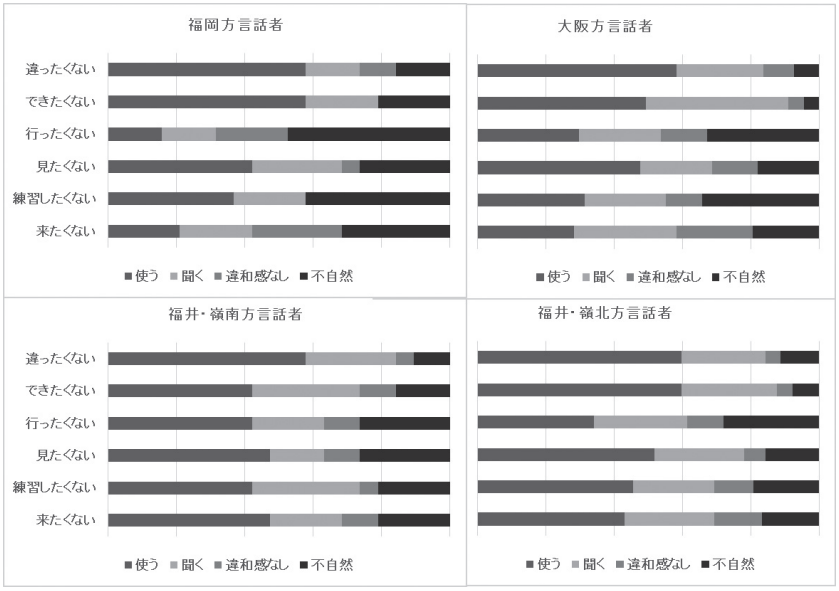
4．1．「クナイ」の共起関係

黒﨑（2019）では，品詞の違いに関わらず様々な品詞において「クナイ」との共起が見られたが，本稿でも同様の結果を得られた。動詞との共起関係について，【グラフ1】を見ると「できる」といった状態動詞は高い容認度が見られたが，動作動詞・存在動詞といった様々な動詞の種類でも共起できる[3]。

【グラフ1】動詞＋「クナイ」の容認度



【グラフ2】タ形＋「クナイ」の容認度



[3] 動詞の種類については，工藤（1995）の分類に基づいている。

また，基本形だけでなくタ形との共起も見られた。高木（2009）では，（８）～（10）のように一段動詞・サ変動詞・カ変動詞のタ形＋「クナイ」は，〈希望〉を示す「したい」の否定疑問形と同形になり，混同されると指摘している。

（８）この映画、一緒に見たクナイ？

（９）ダンスの練習したクナイ？

（10）お父さんとここに来たクナイ？

音声言語においてはアクセントの位置でこれらの区別をするようだが，アンケートではその判断が難しい。そこで，「過去」の事柄であることを示すために，【表２】の（ap）～（ar）のように時間を示す語（例えば「こないだ」「昨日」）を明記した。

【グラフ２】を見ると，どの語においても半数以上が容認できるとした。特に，「違う」や「できる」といった状態動詞のタ形の方が，「クナイ」と共起しやすいようである。以上のことから，「クナイ」の文末詞化が進んでいるといえる。

次に，【グラフ３】のように形容詞・形容動詞語幹との共起も見られた。形容詞との共起は全体的に高い容認度ではないが，嶺北地域が最も容認度が高く，西に向かうにつれて容認度が低くなっている。この理由については現時点でははっきりしないが，形容詞の基本形に接続するということは，西日本の東側の地域の方が「クナイ」の文末詞化が進んでいると推測できる。

形容動詞語幹との共起については，福岡方言話者が最も高く，東に向かうにつれ容認度が低くなっている。これは，形容動詞がカ語尾となり形容詞との区別が曖昧になるという九州方言の特徴が影響していると考えられる（cf. 住田　1985）。また，嶺北方言や近畿方言では形容動詞の否定形として「ジャナイ」形が伝統的にあり[4]，現在も「ジャナイ」が形容動詞語幹と共起しやすいのだろうと考えられる。

名詞および名詞性のある形式との共起について，【グラフ４】を見ると，他の品詞に比べ容認度は低いが全く認められないというわけではないようである。

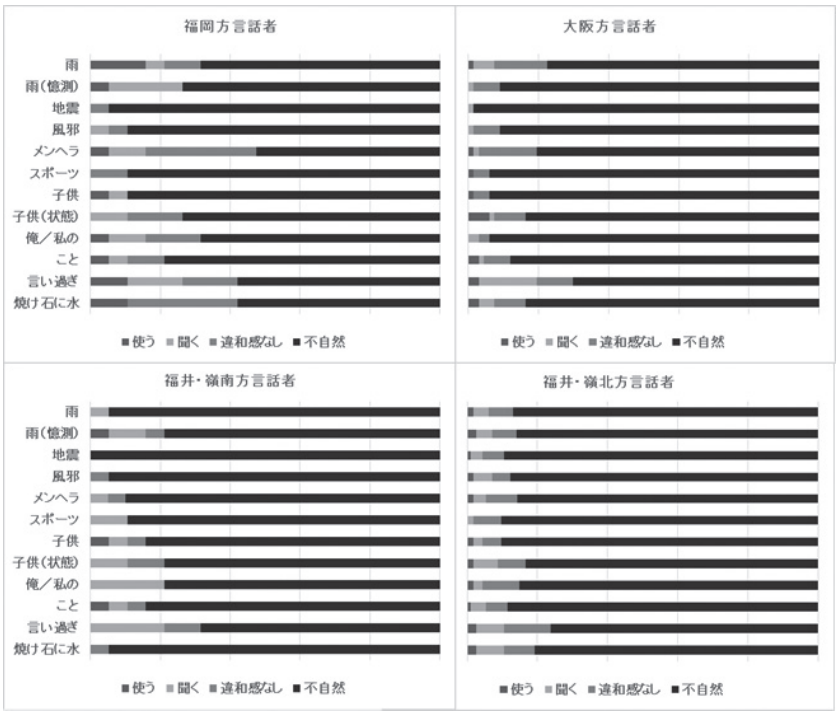
「言い過ぎ」という動詞が名詞化したものは，どの地域も比較的容認度が高かった。また，「メンヘラ」については福岡と大阪では比較的高い容認度が見られたが，福井では嶺北と嶺南どちらも低い結果となった。「メンヘラ」は主に女性に対して用いられるが，今回調査に協力した福井の若年層は高等専門学校に通う学生であり，男性が多く女性が少ないという環境であるため，日頃から使用する機会が少ないことが原因と考えられる。このように，使用頻度の高さが共起関係に影響を与えることも考えられるため，今後も留意が必要である。

以上のことから，西日本の広い地域において「クナイ」は用いられ，品詞の違いによる共起の制限は緩和しつつあるといえるだろう。

【グラフ３】形容詞／形容動詞語幹＋「クナイ」の容認度

[4] 国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図　第３集』による。

【グラフ４】名詞／名詞性のある形式＋「クナイ」の容認度

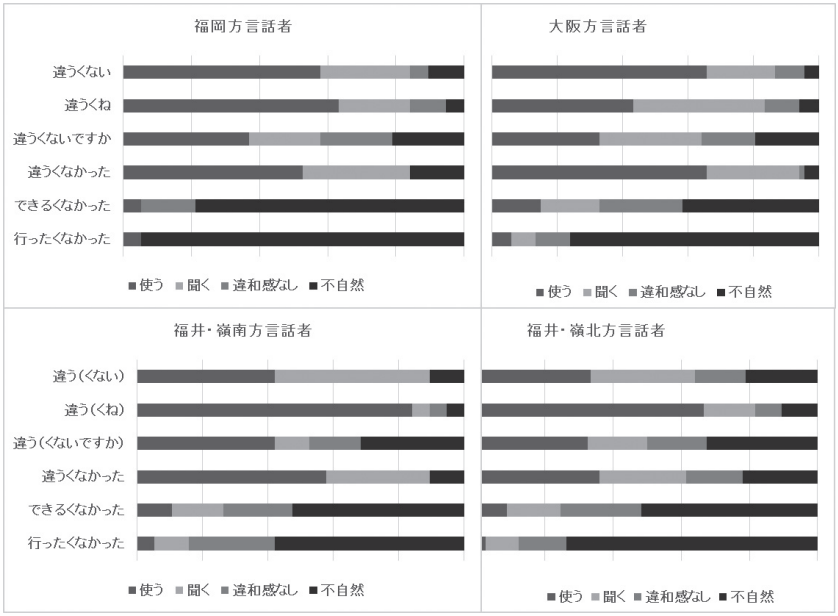


４．２．「クナイ」の形態

「クナイ」には，基本形，クネ形，タ形，丁寧形の４つの形態が確認できた。高木（2009）では，タ形と丁寧形はほとんど使用されないと述べているが，【グラフ５】を見ると必ずしもそうではなくなっていることがわかる。

「クナイ」の基本形とクネ形が，主に使用されているようである。回答者から，「クナイ」より「クネ」の方をよく使うという情報が得られた。クネ形は田中（2010）の指摘する「とびはね音調」を帯び，親しい友人間で用いられる形式である。丁寧形はどの地域でも比較的容認度が低かったことから，「クナイ」は親しい間柄の友人に対して用いられる同意要求表現といえるだろう。

【グラフ５】「クナイ」の基本形／クネ形／タ形／丁寧形＋「クナイ」の容認度



タ形については，前節要素によって結果が異なる。「違う」とはタ形でも共起するが，「行った」とは共起が認められない場合が多い。井上（1985，1998）が指摘するように，若年層の間では「違う」を形容詞的な活用で用いることがあるため，「クナイ」のタ形とも親和性が高いのだろう。もう一つの状態動詞である「できる」との容認度がそこまで高くない原因としては，「違う」に比べて形容詞的な側面がないためだろう。

また，Twitter上では下記のように「クナカッタ」を用いた文が複数見られる。

（11）A1：インスタって通話機能あるんすか？
　　B2：あるクナカッタ？　（2020/08/18）

（12）３月まで待てん感じ？３月名古屋行くクナカッタっけ？　（2020/01/24）

（13）去年池田の方に行ったクナカッタっけ？？笑　（2015/08/15）

しかし，用例が多くないことから，「クナカッタ」は文末詞化には至っておらず，あくまでも「クナイ」の活用形かつ「違う」と親和性が高いもので，基本的には基本形の「クナイ」を用いるのだろう。

今回は十分に考察できなかったが，（12）と（13）を見ると，「クナカッタ」は必ずしも過去を表すのではないと考えられる。（13）は，「去年池田に行った」という過去の出来事を聞き手に確認しているのに対し，（12）は「３月に名古屋に行く」という未来の事柄を聞き手に確認している。また，これらの事柄は話し手にとっては確信度の高いものであると思われる。「クナカッタ」の前接要素が動作動詞の基本形であれば未来の事柄について，過去形であれば過去の事柄について話し手が確信を持って聞き手に確認する傾向にあるのかもしれない。

また，下記のような「ンダ（ノダ）」形との関連も考えられる。

（14）３月名古屋に行くンダッケ？

（15）いつ名古屋に行くンダッケ？

（16）＊いつ名古屋に行くクナカッタ？

（14）も，（12）と同様「名古屋に行く」という未来の事柄に対して話し手が聞き手に確認をしている。どちらも聞き手に対する話し手の確認を示す形式と判断できる場合，話し手の事柄に対する確信度に違いがあると考える。これについては十分に考察できていないが，（15）～（16）に示したように，用法に異なりがある。（15）のように，聞き手がいつ名古屋に行くか話し手が十分に把握していない場面では「ンダ」は用いられる。しかし，同様の場面でも，（16）のように「クナカッタ」は使用できないように思われる。このことから，「ンダ」より「クナカッタ」の方が，話し手にとってより高い確信度を示して聞き手に確認をとる形式であると推測する。

今後，上記の点について追加調査が必要だろう。

４．３．「クナイ」の用法

次に，否定疑問文との関わりを考慮して，「クナイ」の用法について分析を行う。

４．１．で形容動詞との共起について述べたが，「変」と「大変」は，（ｑ）や（ｓ）のように話し手の望ましくない事態の実現に対する不安といった〈話し手の感情〉を示したものと，命題に対する話し手の意見を述べた〈話し手の判断〉を示したものの２つを用意した。「変」においては，どの地域でも〈話し手の感情〉を述べる場合に「クナイ」が用いられる。しかし，「大変」においては福岡と大阪より福井の方が〈話し手の感情〉を述べる場合に「クナイ」を容認することが判明した。これについては語彙的な問題も考えられるが，ここでは地域差という観点から指摘したい。小林（2017）や小林ほか（2017）において，東日本方言では感動詞のバリエーションが豊富で，会話の展開を感動表現が支えているのに対し，西日本方言は感情を抑える傾向にあると述べている。この点を踏まえると，東日本に近い福井の方が福岡や大阪より〈話し手の感情〉を「クナイ」で示すというのは，地域的な特徴によるといえるのではないだろうか。

次に，「クナイ」は主に〈同意要求〉の場面で用いられるが，〈否定〉の場面でも用いられることがある。【グラフ６】を見ると，「好き」「嫌い」「嫌」という形容動詞語幹において，〈否定〉の用法でも用いられることがあると判明した。

「好きくない」は，〈同意要求〉でも〈否定〉でも，どの地域においても比較的容認度が高かった。それに対し，「嫌いくない」は〈否定〉でも用いられるが，〈同意要求〉に比べ容認度は低い。また，地域別に見ると，福岡や大阪では「嫌くない」の容認度が低いのに対し，福井ではどちらの用法においても容認度が高い。このことから，これらの形容動詞は，話し手の感情を表す語である。このことから，福井は他地域に比べ感情表現と「クナイ」の共起が起きやすいと考えられる。先述した東日本方言と西日本方言における感情表現の差異が，これにも影響しているものと推測できる。

次に，アスペクト形式を用いた文において，【表２】（ag）のような「話し手の判断の妥当性を追認できるものが発話場面に存在」（高木　2009：９）しない場合と，（ah）のような「話し手より聞き手が情報量を多く有している場合」（高木　2009：９）には，クナイは容認されないとした。しかし，【グラフ７】のように黒崎（2019）と同様，本稿でもどちらの文脈でも使用可能で

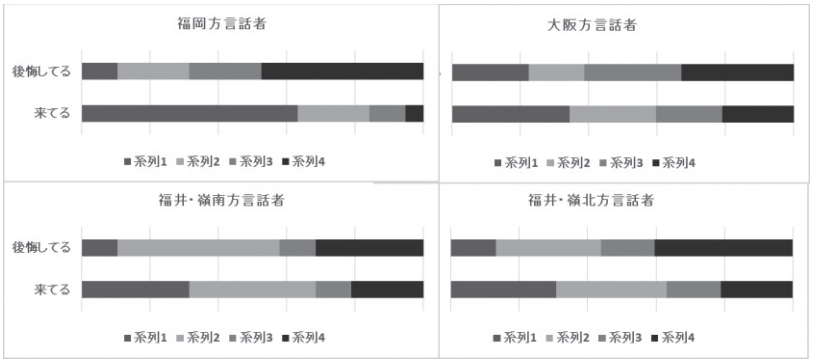
【グラフ６】感情を表す形容動詞語幹＋「クナイ」の容認度

あることが判明した。

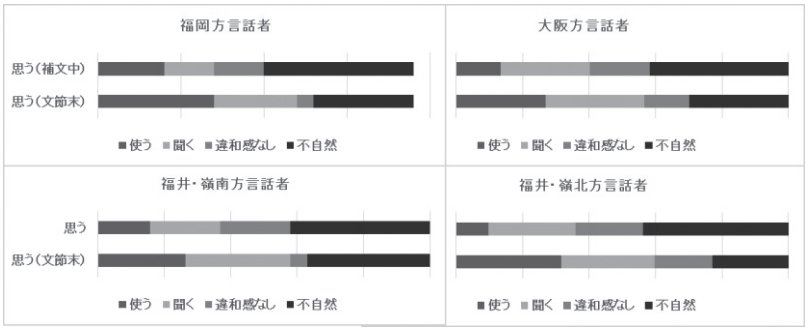
以上のことから，クナイには話し手の命題に対する主観的な認識が表れており，その根拠も話し手の主観的なものによると言うことができる。つまり，クナイを用いる若年層は，主体的判断と客観的事実の境界性が曖昧になり，「不確実な事態」であっても「確実な事態」として表出する傾向にあるといえる。

次に，話し手の認識を表す動詞「思う」との共起について，【グラフ８】を見られたい。

【グラフ７】アスペクト形式＋「クナイ」の容認度



【グラフ８】思う＋「クナイ」の容認度



高木（2009），平塚（2009）において「クナイ」が用いられないとした【表２】（ｄ）のような補文中の命題の真偽を問う文脈でも，黒﨑（2019）同様使用できることが判明した。

高木（2005）のように，【表２】の（ｄ）のような文では「思ワナイカ」が用いられ，これが話し手の認識の妥当性を聞き手に問いかける形式として固定化していると考えられてきた。しかし，本稿の結果から「クナイ」がその役割を担うようになったといえるだろう。先述したように，「クナイ」に話し手の主観的判断を聞き手に伝えるのに相応しいため，話し手の認識を示す形式として選ばれたのだろう。

４．４．若年層のコミュニケーション

これまでの分析結果に基づき，「クナイ」を用いる若年層のコミュニケーションの実態について考察したい。

【グラフ７】で見たように，話し手が発話時に命題についての根拠を確認できない場合でも「クナイ」は用いられる。また，【グラフ８】で見たように，「思う」との共起が確認できたが，この語には國澤（2014）の指摘するように「話し手にとって確実な事態について断定の形で言い切らず、あえて話し手個人の思考内容であるということを表す」（國澤　2014：61）という婉曲用法がある。つまり，「思う」は話し手にとっては確実な主観的判断を表す語であるといえる。４．３．でも述べたように，「クナイ」にも話し手の主観的判断を示す働きがあるため，共起性が高いのだろう。

以上のことから，若年層のコミュニケーションにおいては，話し手の情報の根拠が客観的事実に基づいていなくても，話し手が確実と判断すれば「クナイ」を接続させ聞き手に同意を求めることができる。話し手が自分の判断を重視する自己本位なコミュニケーションといえるかもしれない。今後さらなる分析が必要だが，高木（2009）や平塚（2009）では使用できないとされた，話し手の主観的判断の強い場面でも使用が確認できたことから，主観性に特化したコミュニケーションが若年層間でより広がっていくと予測できる。

４．５．「（ッ）ポクナイ」との比較

本節では，「（ッ）ポクナイ」という若年層間で用いられる否定疑問形式との比較を通し，「クナイ」の実態について考察する。

「雨」と「子供」を含む作例文については，【表２】（ｖ）のように話し手の憶測を示したり，（ab）のように人物の状態を示したりするものと，〈話し手の判断〉を示したものを用意した。話し手の憶測や，人・事物の状態を話し手に表現する際には，（17）や（18）のように「（ッ）ポクナイ」という形式が用いられることがしばしばある。

（17）なんか、今日雨ッポクナイ？

（18）あいつの言動って子供ッポクナイ？

（17）は，話し手が発話時の空の様子から今後の天気についての憶測を述べたものである。（18）は，話し手にとって「あいつ」と呼ばれる人物が幼稚な状態にあることを聞き手にたずねている場面である。（ｖ）や（ab）では，「クナイ」より「（ッ）ポクナイ」の方が適切と判断され，「クナイ」は共起しにくいと考えていたが，予測と異なる結果が得られた。

【グラフ４】を見ると，状態を表す「子供（ッポイ）」についてはどの地域も「クナイ」との高い容認度が見られた。状態動詞との共起が起きやすいという先行研究での指摘を踏まえると，当然の結果といえるだろう。

しかし，（ｖ）のように話し手の予測を示す場合，福岡と大阪では「雨」と「クナイ」は共起しにくいが，福井では共起しやすいという結果になった。これは方言による違いによるものと推測できるが，現段階では十分な考察を行えていない。今後の課題とする。

これが地理的特徴によるものであるならば，「（ッ）ポクナイ」と「クナイ」が担う役割に重なる部分はあるが，予測を示す文脈において名詞に後接するのは「（ッ）ポクナイ」が選ばれやすいと考えてよいだろう。しかし，両者にどのような異同があるのか，今回は十分に考察できなかった。また，形容動詞語幹との共起でも確認したように，「ジャナイ」との競合の可能性も考えられる。これら３つの否定疑問形式の共起や用法について，今後も引き続き調査を行っていきたい。

５．まとめ

本稿では，福岡・大阪・福井の３地点に在住するそれぞれの若年層方言話者を対象に，文末形式「クナイ」の共起関係および用法について考察した。

その結果，「クナイ」は同意要求に特化した文末形式であり，様々な品詞を前接要素として持つことが判明した。動詞は，状態性の有無に関わらず共起し，形容詞や形容動詞語幹は，地域による差異はあるものの共起関係が認められた。名詞および名詞性のある表現については，容認度は高くなく使用頻度の差が影響していると考えられるものの，人や事物の状態を示す場面においては共起しやすいことが判明した。

「クナイ」の形態については，基本形，クネ形，タ形，丁寧形の４つが確認できた。このうち基本形とクネ形が主に用いられ，丁寧形が最も用いられにくいことが判明した。このことから，気心の知れた間柄において用いられる形式であるといえる。

また，タ形について，その前接要素には動詞の基本形とタ形が認められ，その用法に差異がある可能性を示唆した。動詞の基本形が前接要素となる場合は未来に関する事柄を述べ，動詞のタ形が前接要素となる場合は過去に関する事柄を述べると考えられる。しかし，十分な分析は行えなかったため，今後の課題とする。

その他の用法について，福岡では〈話し手の感情〉を示す場面において「クナイ」が用いられにくいのに対し，福井では用いられやすいことが判明した。この成立プロセスには，話し手の感情の表出の仕方が東日本方言と西日本方言とで異なることが影響していると考える。本稿の対象地域は西日本だが，福井は東日本側であるため，東日本方言の特徴が僅かに反映しているのだろう。

また，アスペクト形式や「思う」との共起関係から，〈話し手の判断〉を述べる場面において，客観的な根拠に基づいていなくても「クナイ」が用いられることが判明した。先行研究では，話し手側に客観的な判断根拠が確認できない発話場面では用いられなかったが，次第に判断が主観的で曖昧でも用いられるよう変化した。これは，聞き手よりも話し手の意見や判断を重視する若年層のコミュニケーションスタイルが反映したものと考える。「クナイ」を用いることでコミュニケーションに主観性が増したのか，上記のようなコミュニケーションを行う中で「クナイ」がそれに対応するように変化したのか定かではないが，今後，主観性の強いコミュニケーションおよび言語形式が若年層間で広がると予測できる。

成立プロセスについては，先行研究と同様，デキナクナイ（標準語）→デキンクナイ（否定辞ンを用いたネオ方言）→動詞否定形＋クナイ，というプロセスを経ると考える。また，形容動詞の共起に関して，形容詞と形容動詞との近接性が九州から東に向かって広がるとともに，形容動詞との共起も広がりつつあると考える。

「クナイ」の使用実態について地域による差異はあるものの，西日本において文末詞化が広範囲で広がっている形式であるといえる。

しかし，今回は地域ごとに人数にばらつきがあった。特に，福岡と嶺南地域が少なかった。方言間の差異から「クナイ」の成立プロセスを考察するためには，今後より多くのデータを収集する必要がある。

また，「（ッ）ポクナイ」と「ジャナイ」との競合の可能性も考えられる。同意要求を扱った研究で，以上の３種の形式がどのように関連しているかを扱った研究はない。こういった新しい形式について，共起関係や用法といった観点から形式間の相違について考察することは，文法研究の発展において重要なことだろう。また，「クネ」というとびはね音調の形式が用いられやすいことから，音調と文法機能の関わりについても考察する必要があるだろう。

参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

井上史雄（1985）『新しい日本語―<新方言>の分布と変化―』明治書院

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

國澤里美（2014）「現代日本語における「認識のモダリティ」―世代差が生じる要因―」博士論文　名古屋大学大学院国際言語文化研究科

黒﨑貴史（2019）「山口県若年層の用いる文末形式「～クナイ」について」第278回筑紫日本語研究会・九州方言研究会（於筑紫女学園大学）　発表資料

小林隆（2017）「感動詞の地域差―何のためにどう驚くか―」感動詞ワークショップ（於県立広島大学）　発表資料

小林隆ほか（2017）『方言学の未来をひらく　オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房

住田幾子（1985）「九州方言における「カリ活用」の現況」『日本文学研究』21巻　pp.177-186　梅光女学院大学日本文学会

高木千恵（2005）「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文――「～コトナイ」を中心に――」『阪大社会言語学研究ノート』７巻　pp.73－87　大阪大学

高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』第５巻４号　pp.1-14　日本語学会

田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院

平塚雄亮（2009）「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ（カ）」『日本語文法』９巻１号　pp.71-87　日本語文法学会